

△対談▽

## 宗教における魔・悪魔の問題（下）

西谷 啓治  
阿部 正雄

### 十五、空の自己焦点と神および自己

西谷 それから、さつきいった第二の点ですね。さつきの絶対無の自己焦点と西田先生のいわれたところ、そこは、宗教の立場でいえば、宗教的な世界観のところで、神というものが考えられる。例えは世界を創造し支配する神というようなものですね。しかし宗教は自分の靈魂の所在ということの問題だから、その絶対無の自己焦点のところは、眞の神とか仏とかが考えられる反面に、自己というものがほんとうに自覚されるところもある。

しかもそれは、昔からの思想でいわれる神人合一のミステイック、神秘主義というのとは違う。そうすると、絶対無の自己焦点といわれたところの自覚とは、どういうことか。その点はどうですかね。つまり、それが端的にそれ自身をあらわす場合、これはどうなんでしょう。たとえば「神」だったら、神の自己顯示とか、啓示、オッフェンバーレンクとかいうことが昔からありますね。仏の場合だったら、仏のお告げだとか、あるいは仏の広い意味での廻向、仏から衆生の方へ向かって何か働きかけてくるという、仏自身の功德を廻付する、そういう廻向

という考え方があつからあつたわけですね。あなたの場合は「空」とか「絶対無」とかが基底（むしろ無底）になるわけだから、啓示とか廻向というだけでもない。とにかく、キリスト教的な意味での神が自己を現わし示すというのとは、かなり違うはずだし……。

阿部 先生がおっしゃるよう、そこは啓示の神とか廻向する仏とかいうのでは、ちょっと当らないですね。絶対無の自己焦点というのは、むしろ久松先生のいわれるような無相の自己焦点というべきではないかと思います。

無相がほんとうの主体であるところでは、空は無相の自己として結晶する、自己焦点を結ぶ。それではじめて空は真の意味の空になるので、そうでなければただの空々漠々というネガティヴなものになりますからね。それはまた西谷先生のおっしゃる根源的、主体性だといつてもいいと思うのです。根源的主体性というのは、空の自己焦点として結晶した中心、だからそれは啓示の神とか廻向する仏ではないわけです。

西谷 自己ということですか。

阿部 そうです。それは、ほんとうの自己ということ

ではないでしようか。つまり啓示する神とか廻向する仮に相対する自己ではなく、空の自己焦点としての自己ですね。ただその場合、さきにいいました空の自己焦点としての人格的神ということとのかかわりはどうなるのかというむつかしい問題が出てきますが……。

西谷 さつきお話を出ましたが、仏教では即身成仏義というのがありますね。例えば日蓮宗でも真言宗でもそういうのがありますね。例えは日蓮宗でも真言宗でもそうらしいが、そういう方向とはどうですか。「即身」というのだから、非常に直接的な形ですね。

阿部 日蓮の場合だと、久遠実成の仏ということでしょうか。そこで即身成仏ということがいわれていると思うのですが、私よくわかりませんが、久遠実成の仏というのには、これはやはり空ですか。

西谷 空という言葉は、もしそれを空と置いてしまえば、さつき焦点とか結晶とかいわれたようなものがないって、空々漠々としたような（笑）……。

阿部 ええ、私がうかがいたいのは、久遠実成の仏ということは、たとえば阿弥陀仏などと一應肩を並べる――

西谷 そのことはぼくも無相ということでわからんこ

などにあたるようなものなのか、つまり、報身仏なんか、あるいは報身仏のもうひとつ奥にある法身仏、ダルマカーヤであるのかということですが。

西谷 そういうカテゴリだけでは足りないという感じがありますね。だって法華経でも一乗という。なんでも一応は絶対的な一元にまで徹底する。三身ということが一つになつたようなところを抑えてないと不満足が残るという意味じゃないですか。

編集部 三身即一身という言葉もあります。

西谷 だからそういう形でないと久遠実成ということはいえないかも知れませんね。久遠といえれば法身だが、それだけだとどこか遠い感じで直接性がない。実成の面を切り離して取ると報身になるのかも知れないが、久遠という感じが弱くなる。それで結局、三身即一身という形になる。キリスト教の三位一体の考えもそうですが、仏教でも大乗の立場だとやはりそういうことになる。しかし問題になるのは、そこへ更に即身成仏といわれたようなことが結びつく。その点はどうなんでしょう。

阿部 大日如来、それは即身成仏ですね。

西谷 大日如来にはいろんな働きがある。大日如来の法身説法ということまで言う。仏の働きがわれわれ衆生の身口意の働きにまで繋がつてくる。あなたの無相といふのにもそういう一面があるわけですか。

阿部 そこはおそらく、大日如来の場合も別物ではないと思います。ただ大切なのは、いかなる相もない、だからいかなる対象性もないということで、それを徹底させなければならないと思うのです。阿弥陀仏を信ずるという場合も、それ自体がどれだけ信仰として深くても、なおそこに他から区別された「阿弥陀仏」という一つの相、相ならぬ相を免れていないという意味で、それは真の究極的根拠にはなりえない。そこに、そのような報身仏の裏に魔が自覚されざるをえない所以があるわけですが、魔というのも、なお「魔」という相があるわけですから、そのような相も脱却されなければならない。そこに仮にも非ず魔にも非ずという自覚を介して、はじめていかなる相をも脱却した眞の無相がそれ自体として自覚されてくるのではないでしようか。

西谷 そのことはぼくも無相ということでわからんこ

とはないと思います。ただ、その無相の自覚には、無相

が現成するというか実成というか、とにかく無相がほんとうに現わてくるということはあるんでしようね。さ

つき啓示という言葉を出して、その言葉が当たるかどうかわからないが、とにかくそういうことが問題になる一面があるんじゃないか。それがないと一種の観念、無相の相という観念になる恨れがある。「即身」的な直接性がなくなる。

阿部 それは、おっしゃる通りだと思います。もし無相にとどまっていたらそれも一つの相になってしまふわけですから、無相も否定され、自己焦点を結ばなければならぬ。空も不斷に自らを空じて有に転じなければなりません。仏教でいえば真空妙有といわれることではないかと思います。そこでは、ほんとうの自己とさまざまなもののが、同時に妙有として成り立つてくる。そしてだれでもが、そういう意味の空の自己焦点としての無相の自己であるということが本来のあり方ではないでしょうか。

西谷 それはそうとして、それが眞の神だ、と……。

阿部 それはちょっと言い方が当らないのではないか

と思いますが。

西谷 真の神でいいかとぼくは訊いたんですけど。

阿部 神という言葉の意味にもよりますが、眞の神だけは言えないのではないかと思います。いわゆる覺者といふ意味でいえば、眞の仏ということがいえるかもしれないませんけれども……。

## 十六、神の新しい観念

西谷 それはさっき言ったように、「神」の新しい観念というような問題だということなら、それでもいい。

新しい神観念といつても、「神」といわれるものについての新しい解釈の問題ですね。現代の問題状況では、「無神」ということの新しい観念も問題になり得る。今までの無神論は今までの「神」の存在を否定するということだったが、現代では新しい「無」神観念への方向も不可能ではない。その方向から新しい神観念も生れるかも知れぬという意味を含めてですね。仏教が「無神論」といふ言われることも、そういうコンテクストのなかで本当の問題になるかも知れない。あなたがよく御存知のソ

ンターク……。

阿部 ええ、フレデリック・ソンタークという人。ク

レアモントのポモナ・カレッジの哲学の教授ですね。

西谷 あの人人の本、『悪魔の神』でしたか。

阿部 そうです。『グッド・オブ・デヴィル』。

西谷 あれはさつきのサルトルの『有と無』なんかと関係がある。サルトルのは無神論の立場ですね。唯物論的なヒューマニズムというのかな。ところがソンターク氏はその影響を受けとめて、新しい神観念ということを言って問題にしているわけですね。その新しい神観念というのは、やはり Being という大きな有だが、これまでの人々と違うのは、ノン・ビーベイングということを非常に問題にしている。具体的な細かい議論には一々立ち入れないが、とにかく、神はビーベイングであると言

う時のその神が、見方によると、あなたの考えに似ているような感じがないでもない。ビーベイングということといわば一種の焦点みたいな意味合いのものになつている。氏の場合は神の問題だから焦点はどうしてもビーベイングということになりますが、ただそこで近代無神論と

いうのが問題になる。その無神論は従来の神観念というものをすっかり否認しているが、氏はこれは尤もだと評価している。その否認の理由は非常に明白で、それを否定することはどうしてもできないと言う。そこでどうしでも無神論というものを一貫通ることになり、そのときはノン・ビーベイングが重要な事柄になる。ところが昔の観念からいえば、そのノン・ビーベイングはやはり悪魔ということになるのでしょうか。そこで無神論とともに、デヴィルといふことが出てくる。現在の無神論は自分をデヴィルなんていうものは思っていないわけですが、しかし昔の観念でいうと神が潜んだ状態にいるというふうことで……。

阿部 そうですね。神が潜んでいるということですか

ら。

西谷 そこでこんどは、新しい神が出るときに、デヴィルというものが積極的な役割をもつて入ってくる。そしてその場合デモクラシーというものが問題として介入してくるんですね。

阿部 デモクラシーが……。

西谷 民主主義ということをソンターカ氏は強調している。いまの時代は民主主義だということ、それが非常に重要な問題で、民主主義では、人間はめいめいが自主的になつてくる。そして万人がレベル・アップして平均化していく。昔の場合だと一種のヒエラルヒーがあり、高い低いの身分の段階があった。そして今までの神の観念も、そういう位階制を基盤にして成り立っていた。位階制をずっと辿つて行つて、いちばん頂点に行くと、このところが最高の善であつて、いちばん美しくいちばん完全である。そのいちばん高いところ、そこが神の座である。今までは大体こういう考え方だつた。だが、そういう上<sub>上</sub>下<sub>下</sub>の段階というヒエラルヒーはアリストクラティックな考え方で、それではいけないのだ、といふわけです。現代はすべての人間がそれぞれ独立になつた。それがデモクラシーで、そのデモクラシー社会というのは一般大衆の社会、美とか真とか善とか、そんなことにあまりかまつていないうな大衆社会になる。そういう点を今までのキリスト教はあまり重要視していかなかつた。「貧しき者は幸いなり」という観念があること

ある。その高いところでも今までの神学といふものは、さつきの高いところで神を考えていたので、デモクラシーになつて近代の社会が出てきたとき、全然見方が喰い違つた。モラルということでも、どろどろしたもののがいつぱいある段階では、モラルも根本的に違つてくる。それで、記憶も不確かですけれども……。

あの本で特に面白かったのは、あの本の根本の方向ですね。今までの神学では現代にはだめだ、現代では、神は死んだというふうなことがどうしても出てくる。無神論がいろいろ言い立てていることには、みんな否定できない理由がある。だから、それを一應すっかり受けとめて、自分の事柄にする。さつきの底辺のところへ一ぺんかえつて、そこをふまえて神というものを新しく考え直す。そういう態度ですね。そう言つても、ぼくの読んだ感じでは、結局、神というものの基本的な考えは変わつていいんで、たとえば神はビーベイングとして初めから

規定されている。ただ、昔の考案のように高い特別な存在ではないに、同時に一般大衆の泥まみれなビーベイングとも直結している、そういう神ということだつたかな。

西谷 あらゆる本では民衆の苦しみとの連関で、「苦」サッファリングということを非常に問題にしている。キリスト教でもキリストの受難ということで「苦」の問題は含まれていますが、あの本では「苦」の見方になんとなく仏教的な感じがしたような記憶がある。

阿部 おそらくテイリッヒなんかを通つているのでしょうね。ティリッヒのグラウンド・オブ・ビーイングとか。西谷 あの本には、もうひとつピンとこない感じのするところもある。例えさつき問題になつた「神の人格性」ペーノナリティー、それもちゃんと入つていて、それがいわゆる全智全能みたいな神の性格と結びついている。神の超越性ということも入つていて。やはりどこか昔からの神観念が基本にあるみたいな感じですね。民衆的な社会をふまえてということだが、その基本のところがもう一つピンと来ない。

阿部 大きなフレームワークは残つてゐるわけです

## 十七、仏と魔と空

西谷 あなたの場合はその点、空といわれたりして非常に違うわけですが、ただその場合にも、さつき言ったパーソナリティーの問題とか、妙有といわれた事柄とか、そういうなかにも、やはりビーベイングといふこととの問題が入つてくる。これは伝統的な「ほとけ」というものの性格でもあつたわけですかね。とにかく、その辺のところがソンターカの場合などと対比しても基本的に違うという場合に、その違いがどういう形で現われるかということですね。これは「ほとけ」の場合ですが、似たような問題は魔の場合にも……。

阿部 そこはこの前ちょっと……。

西谷 無相の自己といわれているものを、いろいろな問題との繋りのうちで周囲から照らして説明することになると、そういう基本的な問題がいろいろ究明を要求されてくるんじやないか。キリスト教の場合は、基本的に一応ディスムス(有神論)ということでしょうが、仏教

は無神論だといわれるくらいの様子が違いますから、悪魔や魔の問題でも、仏教の場合は、キリスト教が神とサタンと言うのと問題の出方そのものが既に違っているところがある……。

阿部 仏教の場合でいえば、さつきの報身仏的な立場と、そして空の立場ですね。たとえば真宗なら報身仏を中心にして、そこから空もその奥のほうに見るという形になつておりますね。ここでは、空にタッチしているかもしれませんけれども、ほんとうに空を空として自覚していないのではないかと思うのです。空を空自体として自覚するためには一たび報身仏の立場を破るというか、超える、そしてほんとうに空の側に立つ空と自己が一つになる、ということがなければならないと思うのです。

ただそなには連続の道はないのであって、どうしてもそこに報身仏の裏に潜む魔の問題を自覚的に超えなければ、報身仏を突破して空自体に立つということはできない。逆に本来空自体に立つという弾的立場は、それだけだとそれこそデモニッシュになる恐れがあり、あるいは陰魔になつたり天魔になつたりする。そこに古来頑

ト (Urground 根元底) であり、そのウルグルントはウングルント(無底)であると言つてはいる。その辺に彼の思想の特色が現われている。万有の根元底が同時に無底であるとされるところに魔の問題が絡んでいる。

阿部 ぶつかる問題なんですね。

## 十八、悪魔は墮落した天使

西谷 キリスト教では魔の問題というのは、聖書の一

部になつてゐる「黙示録」、あの辺に強烈な形で現われていますね。宗教を基礎にした一種の歴史観、世界観的な歴史観で、歴史の現実状況への解釈と将来への予言とが一体になつてゐる。いわゆる「最後の審判」に向かいつある歴史ということですね。とにかく、そういうような歴史のヴィジョンのなかにサタンも出てきて、神と

並んだ根本的な役割を担つてゐる。「サタンの深み」、デップス・オヴ・サタンというような言葉も出ていたような気がします。聖書にあるそういう歴史的なヴィジョンが源になつて、キリスト教の歴史ではその後いろいろと默示録的な史観の伝統があつたので、ベーメの思想も

空とか但空とか悪取空とかいつて、きびしく戒められてゐるところがあると思います。空もまた自らを空じなければならぬ。「空」というのは名詞でなしに、空するという動詞形で受取るべきではないかと思うのですが、空がみずからを空するところに当然焦点が結ばれてくる。それは眞の自己とよんでもよいと思ひますが、そのような空の自己焦点を根拠として初めて時間も空間も成り立つべき、価値の序列も基礎づけられてくる。ただそのようなグルント自身が、空というウングルントの働きをして成り立つているということが、たえず明らかになつていなければならないのではないか……。

西谷 グルント (Grund 根柢・根拠・理由) という言葉、従つてまたウングルントという言葉も、哲学的には問題を孕んだ言葉ですが、それはともかく、今言われたような考えは、方向としては西洋にもなかつたわけではない。ウングルントというドイツ語を初めて使つたのは、さつきいつたヤコブ・ベーメですが、そのベーメの思想は今いわれたのと似てゐるところがある。神は一切のものを一番根源のところで根拠づけているウルグレン

そういう伝統を受けついでいるわけですね。なにしろ中世末期から文芸復興へ、さらに宗教改革へと、動乱の統いていた時代ですから、歴史の将来への予言とか終末観とか、強い黙示録的な雰囲気があつて、そのなかから悪魔というものが出てきた。悪魔、サタンはもとは大天使だったのが……。

阿部 ルチファーですね。

西谷 大天使のうちいちばん美しい天使で……。

阿部 たしか、三大天使のうち、その中間の天使ですね。光の天使。

西谷 その「中間」ということがまたいろいろな思弁の対象になつたらしいが、その天使があまり自分が美しいもんだから、うぬぼれを起して……。

阿部 神になろうとして。

西谷 神の座につきたいという野望をおこして、その野望のために大天使の座から地獄の一一番深い底まで落ちてしまう。そういう神話ですね。

阿部 悪魔は墮落した天使である、もと天使であつた。それが墮落というか落とされて悪魔になつた。

西谷 ベーメはそことの問題を、やはりあなたのいわれたようなことですが、神と神以下のものとの関係ではない、「神対神」と述べて、ゴット・ヴィイダー・ゴット（神）と神との間のあらがいとして受け取つてゐる。

阿部 それは実におもしろいですね。そこまで行かないと本当の神の問題もわからぬ。

西谷 そういうことで、悪の問題をずっと考えていくと、そしてその問題の解決と結びついで神というものを考えて行くと、どうしてもウンダルントということになる。自分も神になろうとして神に反抗する悪魔、神の座を神と争う神、というような問題を克服するところで神を考えようとして、ベーメがその言葉を出して來た。だからあなたの場合と問題は似ている。

阿部 非常に似ているように思ひますね。

西谷 ベーメの影響というのは、とても大きかったようで、英國などにも大きな影響を及ぼした。

阿部 ウィリアム・ブレークほどですね。

西谷 ブレークなんかもそうですね。ブレークの言葉だと『天国と地獄の結婚』とか、とにかく両極の対立を

ころへいくと、インディフェレンツ、つまり二元性を超えた無差別としての神、さらにそこからウンダルントということになる。ただの無差別というだけでなく、それが自覚的になる。あなたのいわれたのとちょっと似ているような気がしますが、そのところがベーメのウンダルントという言葉が出てくる。神といふものの上で善と惡の問題を追及して行って、最後にいわば善惡の彼岸としてのウンダルント。具体的にいふとギリスト教でいう「愛」です。インディフェレンツ（無差別）というのが既に愛で、愛というのは善いものも悪いものも等しく平等に見る善惡の彼岸で、そういう無差別愛が自覚的になってウンダルント（無底）としての愛が出てくる。シェリングはキリスト教ですから、ひどく苦労して考えていましたが、あなたの場合は仏教の立場だからもっと端的に考えやすい——というと何だけれども、とにかくそういうところがある。

## 十九、空の自己展開としての願と行

阿部 さうきの空の自己焦点ということですが、それ

超えたところが問題だったんですね。そういうこともあらし、そこから尾を引いて、ワーズワースとかその他のいろんな人につながつてゐる。北欧のベーメ主義者ではスエーデンボルク。この人の影響も大きく現代まで続いています。当のドイツでも、シユワーベンその他の地方に影響を受けた神学の流派ができて、いろいろな人が出たらしい。哲學史の上でもベーメの影響はいろいろわれていますが、特に十八世紀の末から十九世紀の初めにかけて、フランツ・バーダー、その友達であったシェリング、或いはヘーゲルなんかも影響をうけている。ぼくが昔訳したシェリングの『人間的自由の本質』、あれなんか悪の問題ですね。悪の問題を「神のうちの自然」という観念で神と結びつけて……。

阿部 ナツーア・イン・ゴットということでしたね。

西谷 あれもベーメの系譜に属していると言えるわけです。神のうちに「Existenz としての神」——これは從来伝統的に神と言わたるものですが——それと「神のうちの自然」——これは悪の問題が神と結びつく接合点です——との二元を考えて、最後に神そのものの一元のと

は別の言葉でいえば、願といふことになるのではないかと思うのです。空が空にとどまつていないので、空自身を空じたとき、それは願になる。すべての人もひとしく空にめざめるようになるという願になると思うのです。ですから願にならないような空は、ほんとうの空とはいえない。ほんとうの空ならばそれは当然、すべての人を同じように空にめざめさせずにはおかないと願に結晶してくるはずだと思います。また願はただ願にとどまつていいで、それ 자체を空じて、こんどは行になり、実際に何かを行なう。行にならないような願はほんとうの願とはいえない。そのように空は願になり、願は更に行になつていく。これは空が何かその外に出ていくということではなく、空の自己内展開として空自身の中に自己焦点をもすんでいくことではないかと思うのです。つまり、それこそが空のやむにやまれぬ働きだと思うのですね。

さき程来、絶対無、又は空の自己焦点は、新しく捉え直された人格的神であるといつたり、直の自己ではないかといつたりましたが、この両者のかかわりをどう捉えるべきかは、実は私自身もまだ十分つきつめて考えて

いないのです。ただ、今のところ、言えますことは、この両者は空の自己展開としての願として同時に押えることが出来るのではないかということです。これは私自身今後の課題にしたいと思っています。ともかく、空はまず願として自己焦点をむすび、更に行として結晶していく。

これは、勿論時間的な前後関係があるようなものではなく、本来一体不可分な空の働きであるわけですが、淨土真宗などの場合はむしろこの空の働きの全体を願のところで抑えるわけですね。そこが真宗の真宗たる所以のところですが、同時にまた問題があるところですね。

西谷 曾我量深先生がね、あの法蔵菩薩は阿賴耶識なりとか、それから、ほとけは自となつて……。

阿部 如来は我れなり、されど我れは如来に非ずとかいつて……。

西谷 そう。如来は我れなり、如来は我れとなつて我れを救いたまう、というような言い方ですね。そうなると、非常に問題は接近してくる感じではないですか。言い方は、禪の行き方と違いますけれども、非常に近くなつてくる。

## 二十、仏と魔の賭け

伊川なんかから貰った手紙の返事なども入つてゐる。その本のなかにも魔の話が出ていて、昔それを何かの雑文に引用したことを見ています。靈源もそれを何かお経のうちから引いているのですが、キリスト教にあるのと似たような話なんだが、仏と魔との間の賭けの話ですね。西洋だと神とサタンとの間の賭けで、『ヨブ記』でも『ファウスト』のプロローグでもそうです。サタンが神に挑戦して、どちらが勝つかやつてみようということです、その賭けが話全体の源になつてゐる。仏教のその話では、悪魔が仏に向つて、あなたの仕事をぶち壊して見せますと言う。仏さんが、どうやって壊すんだと問われると、魔は、自分も頭を剃つて仏衣を着て、仏飯を食べて……。

西谷

あなたの言われた魔の問題は、いくらかそれに似ている。勿論、あなたの場合は、初めから目的意識的に仏法の破壊をというのとは違うわけですね。

阿部 つまり魔はほとけにもなりうる。ほとけの姿をとつて自由自在に働くので、ある意味では魔のほうが仏よりも一段高いという一面もあるわけですね。

西谷 仏様の方では、本当の仏法はそんな魔法でも手の着けられんもんだと言つておられる。

阿部 結局賭けの結果はどうなるんですか。

西谷 今の場合には、仏弟子に化けて、つまり僧侶の姿になつてサンガ（仏弟子の組織）のなかへ潜入する。現代でも例えばコンムニストの細胞が相手方の組織のなかへ化けて潜入するという方式ですね。そういう高級なスペイ活動をやると魔が宣言するんです。魔王の手先きが、

阿部 問題は、その場合の主体は何かということですね。ベーメなんかもゼーベンズフト（憧憬）ということをいいますが、このズフトというのはちよつと願にあたるようになりますが、そうはならないのでしょうか。

西谷 願が基礎になるなんだけれども、願となるとむしろ愛、アガペーに近い。他を救うという仏教の菩薩道の立場ですね。ズフトというのは、どちらかといふと盲目的な、ちよつと魔のほうに近付く方向もありそうです。もっとも、魔に近いんだけれども、そういうなかで実はほとけを願つてゐるんだ、ということになるかも知れないが、しかしまどと自分が何かいろんなことを欲しがつてゐるということだから、魔の方に近い感じでしようかな。

西谷 仏教でも魔の問題はお経などにはよく出て来るが、禪のようにお経にあまり関係ない立場でも時々顔を出している。昔よく読まれたらしい『靈源筆語』という本があつて、靈源という禪師の書簡集ですが、朱熹や程

阿部 仏といわれているものも魔のあらわれかもしれない。仏魔同体ですかね。そうなりうる。ただ私の場合は、自分自身が魔ではなかつたか、自分が善悪を越えた仏道を生きているつもりのものが、実は魔の生活をしていたのではないか、というあくまで魔の自覚という問題であつて、昔からいわれているいろいろな魔の問題は、実はそのような魔の自覚なしには本当の意味はわからないのではないかと思うのです。

西谷 禅宗の伝法の歴史で、『景德伝燈錄』というのがありますね。あのなかにもいろいろ出てくる。ぼくも昔読んで面白かった記憶があるので、一昨日ちょっと聞いて見ました。その『伝燈錄』の最初の部分にインドの禪史があつて、初祖というのは摩訶迦葉、その次が阿難という順序になつて、四代目がウパクッタと発音するのかな、優婆毘多という名前の尊者ですね。その尊者が仏教を盛んに弘めたので、「魔宮震動し、波旬（魔王）愁怖して、遂にその魔力を竭くして正法を害せんとする」とあります。尊者は三昧に入つてそういう事情を観て取る。魔王の方は、尊者が三昧に入つてゐる間にこつそり禪洛

の首飾りを尊者の頸にかける。普通ならこれは貴重な財宝を贈り物にすることですが、魔王には何かのたぐらみがあつたのかも知れません。尊者は定から出ると、首飾りに気がついて……、そこからがおもしろい。尊者は人間と犬と蛇との三つの屍を集めて、神通力で花鬘を作つた。そして見事な首飾りをくれたお札にこれを上げたいと、優しい言葉でいろいろ言う。魔王は喜んで頸を延ばしてそれを受ける。その途端に花鬘は三つの爛れた死骸になつて、臭くてうようよ蛆がわいている。魔王もたまらなくなつて取ろうとするが、いくら自分の神通力を尽してもどうしても取れない。腐爛した死骸が魔王にはきれいな花鬘に見えたというんだから、これは死と魔と繋りという問題と関係しているんじゃないかと、ぼくは臆測しているんですが、よくわからない。

阿部 尊者の方が魔王をつかまえたわけですね……。

西谷だから、魔王は尊者を幻惑できなかつたのに尊者からは幻惑された。つまり、尊者と魔王との眼力も、その眼力と相応する世界も、いわば段が違つていたわけです。とにかく、すつかり困つた魔王は、天界へ昇つて

六欲天（低い天界）の「天主」たちを訪ね、さらに梵天王まで訪ねて、頸の紐を解いてくれるように懇願する。ところが、その天主たちも梵天王も異口同音に答えて、仏の十力を具えた仏弟子の所作である神変は、自分たちのような「凡陋な」者は如何とも仕難いと言う。そして、早く尊者の所へ帰つて懺悔し、仏道に帰依する外に道はないと忠告する。それで魔も天から下つて尊者の所に行き、尊者の命に従つて、合掌しながら帰依三宝を三唱する。

阿部 魔王がですね。

西谷ええ、魔王が。それと同時に花鬘がとれて仕舞う。それで波旬が歎喜踊躍して尊者を礼拝する、という話です。その話でおもしろいと思うのは、天界の神々（諸天主や梵天）が自分たちを「凡陋な」者と言うのに対して、尊者は魔王から「十力の聖弟子」と呼ばれている。つまり「凡」と「聖」との区別が絶対的で、魔王も梵天も「凡」、仏弟子が「聖」で、その間の力、神通力の差は決定的です。

ところが、魔の問題に関して、今の話と様子がすっかり違つた話が禅にはある。その一例は、お釈迦さまに反